

連載 情報システムの本質に迫る

第 123 回 情報システム論にもとづく地域活性化

芳賀 正憲

森本祥一教授（専修大学）が南魚沼市辻又集落で取り組まれた地域活性化アプローチは、情報システム学を地域の問題解決に直接適用、顕著な成果を上げた事例として画期的です。森本教授は、地域コミュニティをひとつの情報システムとしてとらえ、情報システム論に依拠したコミュニティの再生、人財ネットワークの構築を実践されました。その結果、住民の意識改革が図られ、活性化に参加する意欲が高まりました。ブランドコミュニケーションが促進され、地域のコメのおいしさの認知が広まり、継続購入者も増えてきました。

森本教授の取り組みが契機となり、地域おこし協力隊の配置や地域協議会の発足、大学生による集落活性化事業の複数年継続制度の新設等も実現しました。特筆すべきは、“いかなる地域にも対応した普遍的な活性化手法体系化”の可能性と、その有用性が明確になったことです。情報システム学が、経済学、経営学、IT等を牽引し、社会開発の先導役を務める役割を担っていることが実証されました。

情報システム学は、浦昭二先生によって、次のように定義されています。

「世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明し、そのあり様を改善することを目指す」実践的な学問である。

浦先生の定義から、情報システム学は、今まで世の中の仕組みを考察してきた多様な専門分野を抽象し、その本質を示すものであり、また他の専門分野のレベルアップのための参照基準となり、多くの専門分野の人たちがコラボするプラットフォームにもなり得るものであることが明らかになりました。

森本教授は、地域の仕組みを世の中の仕組みの1つとしてこの定義を実践され、定義の的確さを実証されました。

一方浦先生の定義は、情報システム学が、「」内に書かれているようなスコープをもったプロジェクトであることを意味しています。

言うまでもなく、プロジェクト・マネジメントは、情報システム学体系の中の1つの章です。したがって、情報システム学は、プロジェクト・マネジメントと再帰の関係にあります。

プロジェクトは明らかにひとつの情報システムです。そのプロジェクトで新たな情報システムをつくり出しています。プロジェクトは生物的な存在であり、情報システムは自己生成をつづけています。

情報システム学会では、プロジェクトは、次の3つのプロセスから成ると考えています。

1. プロダクト・プロセス
2. マネジメント・プロセス
3. メンタル・プロセス

ここで、1と2は、国際標準的な考え方です。3は、蒼海憲治氏の『プロマネの現場から』に今まで何回も述べられているように、プロジェクトにおけるメンタル・プロセスの重要性から、『新情報システム学序説』で第3の必須のプロセスとして設定したものです。情報システム学会では、Psytech 研究会で、メンタル・プロセスのモデル確立をしていこうとしています。

2のマネジメント・プロセスの対象項目は次のとおりです。

統合	スコープ	タイム	コスト	品質
人的資源	調達	リスク	コミュニケーション	

この中で“コミュニケーション”は、他のすべての項目のマネジメントが円滑に進むように神経系統の役割を果たす、プロジェクトにとって最重要の組織基盤です。神経系統ですから、これが働かないとプロジェクトは機能しません。すべてのプロジェクトは、まずコミュニケーションを確立する必要があります。コミュニケーションを確立すること自体、メンバーにとっては喜びや達成感があり、コミュニケーションの確立をプロジェクトの第一段階のスコープとして設定してもよいほどです。

わが国の場合、ハイコンテクストの文化をもつ組織風土から、従来プロジェクト・マネジメントの管理項目としてコミュニケーションを明示的にとり上げたことはありませんでした。90年代の後半、米国のPMBOKの到来によって、はじめて認識を新たにした経緯があります。

人間の組織・社会にとって、コミュニケーションがいかに基盤として重要か、文化人類学的な調査結果がいくつも報告されています。

進化生物学者のジャレド・ダイヤモンド氏が、ニューギニアに調査に行って、すぐに気がついたことは、伝統社会の人々がきわめて話し好きなことです。時間さえあれば、ときには夜を徹してでも、話し合いをしています。その内容は、今朝こんなことがあった、だれがいつ何をした、だれがだれについてこんなことを言った、などなど、たわいもない話ばかりです。ときには、あるテーマ、例えば「さつまいも」に関して、話題をあっちにふったり、こっちにふったりしながら、延々と会話を続けることもあります。すなわち、オブジェクト指向です。

これは彼らが、学校もなく、テレビや新聞などメディアもなく、しかも非常に危険の多い環境の中で生きていくため、自分たちを取り巻く世界に関する情報を少しでも多く交換・共

有化し、遭遇する危険に備えようとしてつくった情報システムです。(倉骨彰訳『昨日までの世界』日本経済新聞出版社)

メラネシアの諸島間で古くから行われている、クラという、儀礼的な贈物の交換体系があります。広範囲にわたる、慣習・言語の異なる住民の住む島々をひとつの環として、時計回りに赤い貝の首飾り、反時計回りに白い貝の腕輪を、長い航海で安全とは言えないカヌーを使ってわざわざ運び、一回り数年がかりで次々と交換していくのです。クラにもなって経済活動が行われ、かつては食人種もいた危険な地域で、クラは、個人や集団間の社会関係を確立させ、平和を生み出す政治的・社会的役割も果たしています。(祖父江孝男著『文化人類学入門』中公新書)

ドイツ経済は、独自の優れた発展をしてきていますが、その文化的背景が次のように分析されています。

ドイツ文化の特徴として、コミュニケーションと合意形成に、カントをはじめ多くの哲学者の関心が寄せられ、探求が行なわれてきたことが挙げられます。

自己責任で自律的に仕事をするのと、皆が意思決定に関与し協働して働くのとどちらを選ぶかという問いに対しては、ドイツ人の88%が後者と答えています(このときの調査では、日本は60%、米国は58%でした。日本の数値は、従来の日本の組織風土から考えると、やや特異です)。

ドイツでは多くの経済的意思決定が、政府・労働団体・金融機関・産業集団が相互に影響しあうメゾ経済(マクロ経済とミクロ経済の中間に位置する地域経済)のレベルでなされていて、これこそが、米英にはほとんど存在しない経済活動であり、ドイツに明らかに競争優位をもたらしているとされています。(C. ハムデン・ターナーほか『七つの資本主義』日本経済新聞社)

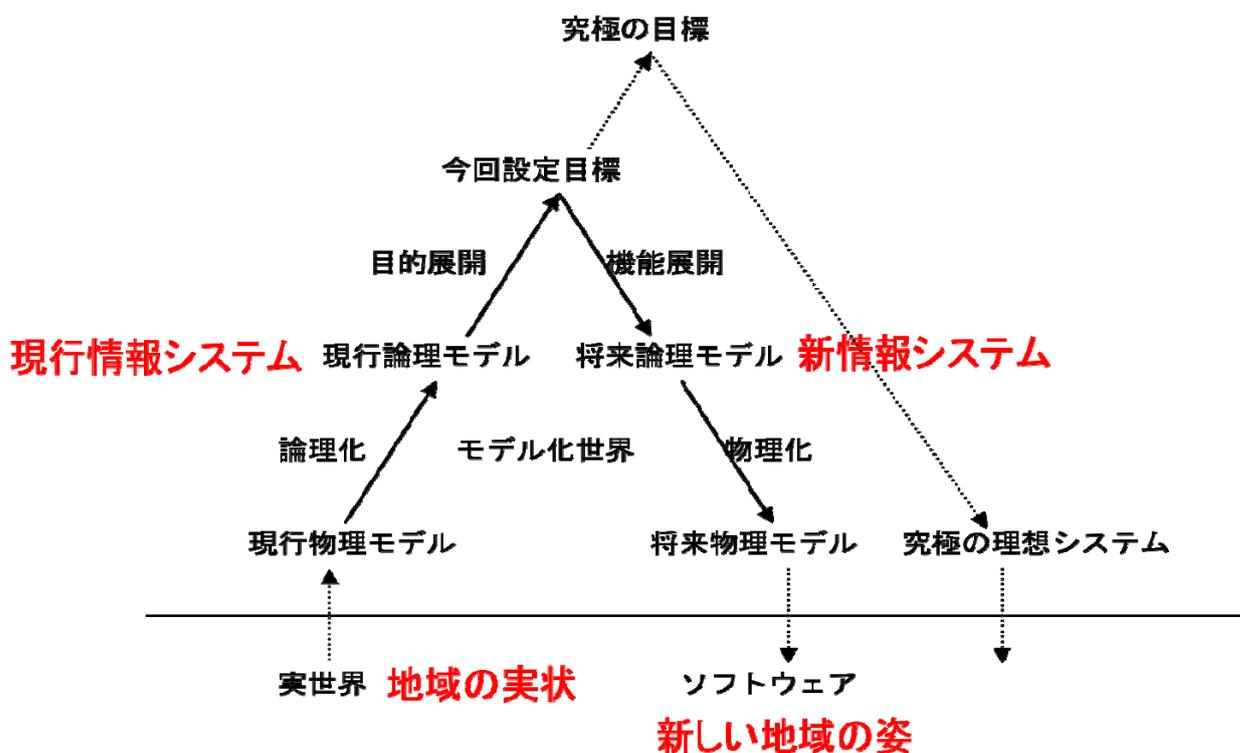
森本教授が南魚沼市辻又集落の活性化事業を、コミュニケーション・システムの問題分析と再生・強化を中心に実践されていったのは、きわめて当を得た進め方です。

次に、森本教授の今回の取り組みを、問題解決や構造化分析の一般的なモデルの中に位置づけてみます。

次ページの図は、問題解決や構造化分析の一般的なモデルを図式化したものです。

このモデルの特徴は、現行の物理モデルから現行の論理モデルを作成、それをもとに新論理モデルを開発するところにあります。新論理モデルをもとに新物理モデルを決定します。図式では上方に論理化・抽象化のプロセスをとっていますが、当初構造化分析を提唱したデマルコの説明では、現行論理から新論理へ横に飛ぶだけですから、台形にしかありません。このとき、何のために問題解決をするのか現行論理から目的展開をして、新たに目的を設定

した上で新論理モデルに機能展開すると、現行論理から新論理への作業を、ナドラーのワークデザインと同等のプロセスを進めることができます。また、目的を頂点とする逆V字型の図で、要求分析の手順全体を表すことが可能になります。



この図式で、地域の実状を表わしたものが、現行物理モデルです。現行物理モデルを抽象化・論理化・本質化した現行論理モデルが、現行の情報システムです。これを目的展開、機能展開して得られた将来論理モデルが新しい情報システムを表わしています。これを実装したものが新しい地域の姿です。

この図式を見ると、情報システムが、現実の姿を抽象化し、その本質を表わしたものであることがよく分かります。

問題解決や構造化分析のプロセスも、ひとつの情報システムです。情報システムの中で情報システムをつくり出しています。両者は再帰関係にあり、ここでも情報システムは自己生成をつづけています。

この連載では、情報と情報システムの本質に関わるトピックを取り上げていきます。皆様からも、ご意見を頂ければ幸いです。